

Title	知覚における志向性と現象的質についての哲学的考察
Author(s)	前田, 高弘
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/44176
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

氏名	まえ だ たか ひろ 前 田 高 弘
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 17485 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	知覚における志向性と現象的質についての哲学的考察
論文審査委員	(主査) 教授 中山 康雄 (副査) 教授 奥 雅博 教授 菅野 盾樹

論 文 内 容 の 要 旨

知覚は、特定の事物に向けられるという意味で志向的な性格をもつと同時に、その事物が知覚者にどのように見えるか（感じられるか）を構成するような各感覚様相に特有の現象的質を伴っている。本論文は、その現象的質の役割や存在論的本性などをどう捉えるべきかということを基本的なテーマとしている。現象的質はクオリアとも呼ばれ、意識の問題との関係で、哲学だけでなく、認知科学や生理学、さらには物理学まで幅広い分野で近年注目を集めているが、そこでは専ら、クオリアを物理的なものに還元することができるか、というような物理主義（ないし唯物論）の問題として論じられるのが普通である。本論文のアプローチはそれとは全く異なり、知覚（ないし知覚を含む全体の認知システム）における現象的質の役割を問うことによって、その本性を追求しようとしている。言い換えれば、形而上学よりも先に、認識論的な観点から現象的質とはどのようなものでなければならないかを問うことによって、その存在論的本性に迫るということである。クオリアを物理的なものに還元することができるかということを議論する人々（特にクオリアの実在を信じる人々）は、しばしば無批判にクオリアを脳細胞の特定の状態と同一であるべきものとしており、世界の事物の見かけや感じられ方を構成するものとしてのクオリアの特性が捉えられていないように思われるものが多い（その特性が捉えられていなければ、結局彼らはクオリアについて語っているのではないということにもなりかねない）。それ故、本論文のアプローチは、クオリアの本質を捉えるためには不可欠であると考えられる。

このように、現象的質の問題が中心的主題であるが、本論文では、直接的実在論や知覚の因果説といった、知覚の哲学における古典的な（必ずしも現象的質の問題に関係のない）問題も扱っている。それらの問題がそれ自体興味深いだけでなく、現象的質の問題と関係付けることによって、それらに新しい洞察がもたらされると考えられるからである。

第 1 章では、我々は身近な物理的事物を直接見ているのかという問題に関し、その問いに肯定的に答える直接的実在論を批判している。三次元的な物理的事物を見るには、直接であれ間接であれ、その事物の形を識別する必要があるが、形そのものに固有の現象的質というものはないために、視覚に特有の仕方その形に現象的に接近するには、二次元的な広がりとして現象的に与えられる色に依存しなければならない、というのがその批判のポイントである。

第 2 章では、知覚の因果説を特に視覚に関して擁護している。この事で現象的質の問題が関係するのは、適切な因果的作用のあり方について論じているところである。即ち、視覚が世界の事物についての知覚として成立するために

は、その事物からの因果的作用が必要であるが、単なる因果的作用では十分でなく、その事物の知覚者に対する空間的關係が、現象的質によって構成される知覚内容に反映されることを保証するものでなくてはならない。

第3章では、伝統的な第一・第二性質の区別を見直し、その区別の存在意義を考えることによって、現象的質の存在意義の問題にも答えが与えられることを論じている。即ち、第一性質だけでは事物の見かけや感じられ方を構成することができないが故に、現象的質によって個別化される第二性質のようなカテゴリーが、世界について自律的に考え判断する志向的存在者にとって要請される、ということがこの事のポイントであるが、これは論文全体においても要となるポイントである。

第4章と第5章では、現象的質に関する哲学的立場として近年有力になっている表象主義について批判的に検討している。第4章では、表象主義の中でも Dretske や Tye などによって主張・擁護されている現象的外在主義を取り上げているが、現象的質は経験そのものに内在する性質ではなく、経験される事物の側に属するものとして経験されるという現象的に本質的な事実を尊重する点で、それは他のタイプの表象主義よりも現象的質の本性に対して忠実であると考えられるからである。しかし、現象的外在主義に対して提示されている反論に対する Dretske らの応答は成功しておらず、彼らの立場の根本的な問題点は、現象的質に特有の主観性が捉え切れていないことである、といったことが論じられる。また、第5章では、表象主義一般に当てはまる問題として、経験と思考の区別に基づく反論（即ち、表象主義では経験と思考の区別ができないという反論）を取り上げ、その反論に答えようとする信原の議論を批判的に検討している。信原のように、概念的・非概念的 content の区別や、言語化可能性の観念を持ち出しても、結局その反論には十分に答えられない。表象的には捉えられない現象的質というものを持ち出さずに経験と思考の区別を説明するには、経験が思考とは違って、媒体的表象を介さずに知覚者に対して直接現前させる仕方であるという点に注目する必要がある、ということが論じられる。

最後のまとめでは、各章の議論を踏まえて、最終的に、現象的質は志向性そのものを可能にすることに関わる特殊な性質であるということが結論的に述べられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、志向性とクオリア（＝現象的質）に関して、欧米を中心になされている現代の議論を取り上げ、それに批判を加えながら、独自の提案を行い、これを論拠付けたものである。志向性とクオリアの問題は、近年、哲学者のみならず、神経科学者や認知心理学者を巻き込んで、活発に議論されている注目のテーマである。このような事情もあり、このテーマを適切に論じるためには、心の哲学を中心とした最新の英語文献の深い理解が要求される。本論文は、この条件を満たすのみならず、現象的外在主義と呼ばれる立場の検討を通して、知覚における現象的質の本性と役割についての独自の見解を展開したものである（ここで言う現象的外在主義とは、色や肌触りという現象的質が経験される事物の側に属するものとして経験されるとする立場のことである）。特に、現象的外在主義についての多角的で細密な検討は、これまで日本で見られなかったものであり、これからの知覚の哲学における研究が参照すべき足場を提供している。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位に充分値すると判定した。